

イリヤ・エレンブルグの写真集 『私のパリ』におけるベルヴィルの表象について (2)

椎原 伸博

序

1：イリヤ・エレンブルグの経歴について

①エル・リシツキーとの関係

②1935年6月のパリ国際作家大会のエレンブルグ

2：『私のパリ』について

(以上、前稿「イリヤ・エレンブルグの写真集『私のパリ』におけるベルヴィルの表象について(1)」
実践女子大学文学部紀要 54巻、11～22頁 2012年)

前稿の概要

本論は、ソビエト時代を代表するジャーナリストで作家のイリヤ・エレンブルグ (Ilya Grigoryevich Ehrenburg, 1891-1967) が、1933年にモスクワで出版した写真集『私のパリ』 (Мой Париж) の、写真史の意味を考察することにある。前稿の1章では、①エル・リシツキーとの関係及び②1935年6月のパリ国際作家大会の二つの視点から、エレンブルグの経歴を確認した。つまり、①では1922年ベルリンで現代美術の批評雑誌『ヴェーシチ』 (Veshch, Gegenstand, Object) を共に出版したエル・リシツキー (El Lissitzky, 1890-1941) が『私のパリ』の装丁を担当し、そこに構成主義的要素を確認した。次に、②ではナチスが台頭してきた時代状況のなかで、反ファシズムを標榜する文化の擁護のための国際会議が開かれたこと、その際エレンブルグとシュールレアリズムとの確執があったことを確認した。また、フォトマガジン『ヴェュ』がこの会議を取り上げており、そういったフォト・ジャーナリズムの影響力を確認した。

2章では『私のパリ』において、エレンブルグが側面ファインダーを活用して、一般市民のありのままの姿を撮影していたこと、エレンブルグの興味の対象は観光地のパリではなく、老人や失業者、ホームレスといった周辺的な人々であったことを確認した。また、写真自体はアマチュアの域を越えることなく、プロの写真家が映し出す映像美の世界を感じさせることはないこと、エレンブル

グにとってカメラは基本的にペンの代替物なのであり、写真とテキストが相互補完の関係が成立すれば良いと論じた。

3：『リュマニテ』におけるエレンブルグ

2章で概観した『私のパリ』が出版されたソビエトや写真の題材となったパリにおいて、どのくらいの影響力を有していたかは、明確ではない。試みにフランス国立図書館の検索サイト Gallica でエレンブルグの名前を検索し、『私のパリ』の出版年の1933年から35年までの雑誌記事に注目すると、『コムニオン誌 (Commune.)』における「文明とファシズム (La civilization et le fascisme.)」の連載が確認出来る。¹その他、『ユーロップ誌 (Europe, magazine mensuel.)』で記事を散見することができるが、その多くはガリマール社の NRF より出版された小説の広告である。そして、筆者が Gallica の検索により『私のパリ』に関連する記事を見いだすことが出来たのは、フランス共産党の機関誌で日刊の『リュマニテ (L'Humanité.)』だけであった。

また、筆者が Gallica で検索して『リュマニテ』上で、イリヤ・エレンブルグという名が確認できた一番最初は、1925年12月7日(9859号)における、アナトリー・ルナチャルスキー (Anatoliy Vasilievich Lunacharsky, 1873-1933)を紹介する記事においてである。翌年の26年6月6日(10039号)では、メイエルホリドのパリと題された文芸欄において、『トラスト D. E』の名が記されている。また、同年8月31日(10125号)において、モスクワで出版された小説『野獣 (Rvatch)』²が紹介されている。次いで27年1月2日(10249号)の海外文芸欄に名を見いだすことが出来るが、その後はしばらく名を見いだすことは出来ない。

次にエレンブルグの名が『リュマニテ』において確認できたのは、1932年5月19日(12210号)においてである。この年は、翌日の5月20日(12211号)にも確認可能であるが、それは20年代の記事が文芸欄においてであったのに対して、『リュマニテ』の姉妹誌的存在であった、写真ジャーナリズム誌で同年に創刊された『ルガール=視線 (Regards.)』の広告においてであった。『ルガール』は前稿で取り上げた1928年創刊の『ヴェユ』の後発雑誌的位置づけにあるが、当然コミュニスト的視点が強かった。その後、Gallica で検索できた1944年までの『リュマニテ』におけるエレンブルグの記事のヒット数は、1934年の18件、35年の22件、36年の8件、37年の1件のあとしばらく無くなる。そして、第二次世界大戦末期の1944年に10件を数えることになる。

表2は1925年から35年までの『リュマニテ』紙上で確認できた、エレンブルグの記事の概要である。その内1934年から35年の2年間で40件の記事にエレンブルグの名前を確認することが出来たが、その多くは雑誌や会議の広告で占められている。その内訳は、雑誌では『ルガール』の広告が10件、同じく左翼系の『モンド』が4件、『コムニユス』と『今日のロシア』が各1件である。また小説の広告は、リュマニテから出版された『モスクワは涙を信じない (Moscou ne croit pas aux larmes. 1933)』が1件、ガリマール社 NRF の『息もつかずに (Sans reprendre haleine. 1935)』が6件となる。

さらに、会議や講演会の告知として、「革命的作家芸術家協会 L'Association des Écrivains et Artistes Révolutionnaires. (AEAR)」主催のものが6件、「フランス解放劇場連盟 La Fédération du théâtre ouvrier de France (FTOF)」主催のものが3件、さらに「労働総同盟 Confédération Générale du Travail. (CGT)」が設立した「文化の家 (Maison de la culture.)」主催のものが5件である。また、

1935年の文学界の重要なトピックであった「文化擁護のための国際作家会議」の告知1件にエレンブルグの名を確認することが可能だ。

結局1934～35年の40件のうち広告や告知関係が36件を占め、残りの4件が所謂「記事」となる。それは、革命的作家芸術家協会が開催した「ソビエト作家会議」の成功を伝える34年10月26日(13097号)、エレンブルグの『地下鉄の歴史』を紹介する34年10月29日(13100号)、国際作家会議を伝える35年6月23日(13337号)、小説『息もつかずに』を批評するJean Frévilleによる署名記事35年10月28日(13464号)である。それらには『私のパリ』に関する言及はない。

一方、『私のパリ』のパリにおける影響に関しては、エレンブルグの回想録において次のように確認できる。つまり、エレンブルグは「写真入り週刊誌『ヴェ』が、アパート管理婦を撮った私の写真を一頁にわたって掲載した。管理婦の中には気性の荒い女が多いことをいっておかねばならない。戸口に立って雑巾で反撃しようとしている、たいそう怒りっぽい女を一人撮った。」³と回想している。また、『リュマニテ』の34年1月19日(12820号)以降、1月22日(12823号)、2月4日(12836号)、2月9日(12841号)、2月10日(12842号)には、『ルガール』の広告があり、そこにはエレンブルグの名と共に、『私のパリ (Mon Paris)』のルポルタージュとある。つまり、『私のパリ』の写真は、『ヴェ』と『ルガール』の二つの雑誌で掲載されていることになる。

ところで、エレンブルグの回想において、『ヴェ』と『ルガール』を勘違いしている可能性も検討しなければならない。というのも、回想録においては、全く『ルガール』の記述がないからである。この回想における女性の写真は、おそらく『私のパリ』47頁の写真(図14)であることが予想できる。しかし、4章で後述するように『ルガール』には、この写真は掲載されていない可能性が高い。すると、エレンブルグの回想どおり『ヴェ』にこの写真が掲載されたのであろう。現状では、『ヴェ』のバックナンバーの確認が出来ていないため、今後の課題としたい。

4:『ルガール』誌上の『私のパリ』

『ルガール』は映画評論家のレオン・ムーシナック(Léon Moussinac)によって1932年に隔月刊の雑誌として創刊されたが、34年1月から週刊誌となった。この雑誌の特徴は、前述した『ヴェ』が豪華な装幀により、高所得者層を読者層としていたグラフ誌的側面が強かったのに対して、『ルガール』は、中流階級をターゲットとするニュース雑誌であった。その『ルガール』が週刊誌として再スタートする1934年1月26日発行の第2号(通巻第34号)の表紙には『私のパリ』の第9章「ベルヴィル」75頁に掲載されている写真がトリミングしたかたちで採用されている。(図15、図16)

以上はGallicaで確認出来る『リュマニテ』誌上の調査結果であるが、中央大学図書館に所蔵されている『ルガール』のマイクロフィルムを確認したところ、『私のパリ』は、週刊誌化された第3号から5号にかけて、連載されていることがわかった。しかし、マイクロフィルムの状態が芳しくないばかりか、連載が開始された第2号のフィルムがなく、その内容は確認できていない。そこで、3号から5号までの『ルガール』誌における『私のパリ』の連載について以下確認する。

① 1934年2月2日発行、第3号(通巻第35号)

この号では、3頁から4頁にかけて、I「セーヌ(La Seine)」とII「ベルヴィル(Belleville)」

の記事があり、3頁の上部左にはエレンブルグの肖像、その右にはノートルダム寺院の塔の上からのパリの眺望の写真が掲げられている(図17)。それは、塔の上にあるガーゴイルが、かすかに見えるサン・ジェルマン・デブレ教会、アンヴァリッド、エッフェル塔を遠望するような表現となっているが、パリの観光名所を網羅する観光絵葉書の写真といえる。そして、この写真は『私のパリ』に存在しておらず、エレンブルグが撮影したものかは疑問である。

3頁には、もう2枚の写真が掲載されているが、左の写真、つまりセヌ川で釣りをしている男性2名と、その間に座り新聞を読む女性の3名が写っている写真は、『私のパリ』31頁の写真(図18)と同一である。一方右の写真、つまりセヌの岸に降りていく階段にワイン瓶が置かれている写真は、『私のパリ』29頁の写真と類似しているが、明らかにトリミングの違いがある。また、『私のパリ』では階段で酔って寝転んでいる男性の姿が確認できるが、『ルガール』の写真では、マイクフィルムの状態が悪く男性を確認するのが困難である。なお、フランス語で書かれている記事は、ロシア語で書かれた『私のパリ』の原稿と同一である。

次に4頁を確認すると(図19)、そこには5枚の写真が掲載されており、多少トリミングされてはいるが、全て『私のパリ』の写真と同一である。具体的には、左上の写真は『私のパリ』27頁のセヌ川沿いのブキニスト(古本売り場)前に座る老婆の写真であり、右上の写真は『私のパリ』33頁の、セヌ川岸辺でお互いの衣装を気にする二人の写真である。これら2枚の写真は、共に第5章「セヌ川」で提示されている写真である。

また真ん中の写真は『私のパリ』121頁、左下は117頁(図20)、右下は115頁の写真であるが、『私のパリ』では第14章の「販売員」で提示されている写真である。記事のテキストの内容を補完すべき写真は、原典の『私のパリ』と『ルガール』とは、異なっていることになる。なお、この章「ベルヴィル」のテキストも「セヌ」同様、ロシア語の原稿と同一である。

② 1934年2月9日発行、第4号(通巻第36号)

この号では5頁～6頁にかけて、前号の続きとしてⅢ「ベンチ(Les Bancs)」、Ⅳ「労働者(Les Ouvriers)」の二つの記事が掲載されている。最初の5頁には5枚の写真が掲載されている(図21)。それらは、前号同様に多少トリミングされてはいるが、全て『私のパリ』と同じ写真である。具体的に言うと、左上の写真は『私のパリ』23頁、右上は201頁であるが、原典では左上が第3章「その年齢」右上が第27章「恋人たち」で掲載されているものである。

次に、5頁の中央は『私のパリ』65頁(図22)、左下は63頁、右下は66頁(図6)の写真である。それらは、原典同様「ベンチ」の章で使用されている写真である。続いて6頁の写真は(図23)、左が『私のパリ』107頁で、右が109頁の写真(図24)と同一であり、原典同様「労働者」の章で使用されている写真である。そして、前号同様に、二つの章のフランス語テキストの内容はロシア語版と同一である。

③ 1934年2月16日発行、第5号(通巻第37号)

この号は、前号までの通し番号が付いた章立てとは異なり、ただ「ホームレス(Les Sans Abri)」の記事のみだけが一頁で掲載されている。そこでは、4枚の写真が掲載されているが、一番上の写

真は、『私のパリ』141頁の写真である(図26)。その写真の右には2枚の写真が提示されているが、上部の写真は『私のパリ』140頁(図27)であるが、この写真は本のブックカバー(図3)にも採用されており、エレンブルグおよびリシツキーにとって思い入れのある写真と思われる。そして、この写真の下部は143頁の写真である。さらに左下に写真があるが、マイクロフィルムの状態が悪く特定できていない。また、先の二つの号同様に、フランス語テキストの内容は、ロシア語版と同一である。

以上現在のところ確認出来ている『ルガール』誌第3～5号の『私のパリ』の写真を総括すると、第3号冒頭の作者の特定が困難な写真を除いて全て人物が写っている写真である。また、それらの多くは富裕層ではなく、厳しい労働環境にいる労働者や、老人や浮浪者のような周辺の人物たちが中心である。それは、表1に示したように『私のパリ』の120枚の写真のうち人物なしの写真が5枚のみという状況を鑑みれば、その確率が高くなることは予想されるにせよ、『ルガール』誌の編集方針は、世界恐慌以降のパリにおける、経済的困窮のような社会問題を正面から扱う姿勢を示しているといえよう。

5: アメリカにおける『私のパリ』の影響 ベン・シャーンの写真

4章では、モスクワで出版された『私のパリ』が、フランスで紹介されている状況を提示したが、それらは共産党に関連する左翼主義的なマス・メディアによるものであった。この動きは、世界恐慌以降のフランスの政治・文化状況を反映するものであり、当然ながら前述の1935年「文化擁護のための国際作家会議」が示す「反ファシズム」の動きに連なっている。それは、ロマン・ロランやアンドレ・ジイドら文化人が深く関わる「人民戦線」の流れにあり、1936年のスペイン内戦の勃発により、その意識は加速することになった。エレンブルグ自身もスペイン内戦のルポルタージュを執筆しているが、スペインにおける悲劇的状况は、『ヴェ』や『ルガール』のような写真雑誌において、ロバート・キャパ(1913-1954)、ゲルダ・タロー(1910-1937)といった写真家たちの活躍の場となった。

ところで、このような社会状況のなか、大西洋を隔てたアメリカで『私のパリ』が受容されていることは興味深い。1926年創刊された『ニュー・マッセズ(The New Masses)』は、1911年から17年の間にアメリカの革命的文学運動において重要な役割を果たしていた雑誌『マッセズ(Masses)』の復興を目指した雑誌であるが、それは、アメリカの共産党の政策を強く反映させ、アメリカにおけるプロレタリア文学運動や反ファシズム運動において重要な役割を果たした。⁴

その『ニュー・マッセズ』誌の1934年9月18日号25～26頁では、ジョン・ボーリング(John Boling)による、“The Face of a City.”と題された記事において、エレンブルグの『私のパリ』が紹介されている。⁵そこではボーリングは、パリの光景を撮影した、アジェやブラッサイ(『夜のパリ』)、ケルテスの写真をあげた上で、それらの写真はパリに広漠としたパノラマの一部を提示しているだけであり、今日のエレンブルグがパリの現状をしっかりと分析しているような洞察は含まれていないと批判し、エレンブルグの写真を評価している(25頁)。そして、その際エレンブルグが使用した「側面ファインダー」により、一般市民の親密な身振りの撮影の効果を強調している。

この「側面ファインダー」は、当時のニューディール政策の一環として、後に「農業安定局(FSA)」

に再編される「再入植局」において1935年に開始された「FSA 写真プロジェクト」において、撮影を担当するベン・シャーン (Ben Shahn) の興味を引くことになる。⁶

ベン・シャーンのニューヨークにおける写真を概観する Deborah Martin Kao, Laura Katzman, Jenna Webster による共著 *Ben Shahn's New York. The Photography of Modern Times*. 2000, Yale University Press. は、その扉頁に側面ファインダーを覗いているベン・シャーンの写真が提示されるだけでなく、次の頁には側面ファインダーを覗くイラストも提示されている(図28)。このことは、ベン・シャーンの写真の特性を端的に示す象徴として位置づけられているといえよう。⁷

さて、この本では前述した「ニュー・マッセズ」の記事も再録されており、そこにはエレンブルグの『私のパリ』の見開き頁(134-135頁)が紹介されている。そして、ベン・シャーンは1934年にウオーカー・エヴァンスを経由して『私のパリ』を手にしたとしている。エヴァンスは、この本をモスクワで映画を学んでいたジェイ・レダ (Jay Leyda, 1910-88) から紹介され、それがベン・シャーンの目にとまることになった。

そしてベン・シャーンは、1935年から38年まで側面ファインダーを使い続け、「FSA 写真プロジェクト」においては、1400点以上の写真を撮影している。それらの写真の多くは、被写体との間に緊張感がなく、貧者に対する人間的な眼差しで満ちているが、その経験は「social realism」から「personal realism」への移行を導き、写真から疎遠となっていくことになる。⁸

(以下、別稿)

注：

- 1 「文明とファシズム」の連載は、『コミューン誌』9～10号(1934年5～6月)で確認できる。
- 2 この小説はソヴィエトの1921年から24年のネップ時代の状況に関するものであり、1930年にはフランス語に翻訳され、ガリマール社から出版されている。
- 3 エレンブルグ(木村浩訳)『わが回想II(新版)』朝日新聞社、1968年、227頁。
- 4 「ニュー・マッセズ」に関しては、帆足図南次「アメリカ・プロレタリア文学運動の軸「ニュー・マッセズ」」(上)(下)が詳しい、『文学』(岩波書店)41巻12号(1973年12月)83-102頁、42巻1号(1974年1月)78-95頁。
- 5 <http://www.unz.org/Pub/NewMasses-1934sep18-00024> 2014年11月6日閲覧。
- 6 FSA 写真プロジェクトについては、竹中 悠美「FSA 写真プロジェクト再考：大恐慌下のアメリカにおける〈貧困〉と〈被災〉の表象」『美学』63巻2号、132頁、2012年、堀宣雄「FSA の写真とベン・シャーン」『ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト ―写真、絵画、グラフィックアート―』美術出版社、2012年、18-20頁。
- 7 デボラ・マーティン・カオ「ベン・シャーンの写真 ―社会を見るレンズ」『ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト ―写真、絵画、グラフィックアート―』美術出版社、2012年、13頁も参照。
- 8 ベン・シャーン(佐藤明訳)『ある絵の伝記』美術出版社、1960年、65頁。

表1 は前稿（紀要 第54集）19頁に掲載

表2 『リュマニテ』誌 1925～35年における、エレンブルグの記事一覧

	日付	号数		
1	1925/12/ 7	9859	文芸記事	ルナチャルスキー紹介記事
2	1926/ 6/ 6	10039	文芸記事	メイエルホルドのバリ『トラスト D.E』1923
3	1926/ 8/31	10125	文芸記事	『野獣』1925の紹介
4	1927/ 1/ 2	10249	文芸記事	
5	1932/ 5/19	12210	広告『ルガール』	スペイン戦線レポート
6	1932/ 5/20	12211	広告『ルガール』	スペイン戦線レポート
7	1934/ 1/19	12820	広告『ルガール』	Mon Paris.
8	1934/ 1/22	12823	広告『ルガール』	Mon Paris.
9	1934/ 2/ 4	12836	広告『ルガール』	Mon Paris.
10	1934/ 2/ 8	12840	広告『モンド』	Les Vertus et les Talents.
11	1934/ 2/ 9	12841	広告『ルガール』	Mon Paris.
12	1934/ 2/10	12842	広告『ルガール』	Mon Paris.
13	1934/ 3/22	12881	広告『モンド』	オーストリア戦局レポート
14	1934/ 4/15	12905	広告『モンド』	オーストリア戦局レポート
15	1934/ 5/29	12948	講演会告知	A.E.A.R ソビエトの文芸について
16	1934/ 5/30	12949	講演会告知	A.E.A.R
17	1934/10/16	13087	書籍広告	『モスクワは涙を信じない』1933
18	1934/10/18	13089	会議告知	A.E.A.R ソビエト作家会議
19	1934/10/19	13090	会議告知	A.E.A.R ソビエト作家会議
20	1934/10/22	13093	会議告知	A.E.A.R ソビエト作家会議
21	1934/10/26	13097	文芸記事	ソビエト作家会議の成功
22	1934/10/29	13100	文芸記事	「地下鉄の歴史」紹介
23	1934/11/ 5	13107	講演会告知	Cercle de la Russie neuve.
24	1934/11/ 6	13108	講演会告知	Cercle de la Russie neuve.
25	1935/ 1/ 5	13168	広告『モンド』	La Sarre.
26	1935/ 3/11	13233	広告『ルガール』	Sans reprendre haleine.
27	1935/ 3/21	13243	展覧会告知	ファシズム国際展
28	1935/ 3/22	13244	会議告知	Destin du Théâtre 1935 告知 FTOF 主催
29	1935/ 3/26	13248	会議告知	Destin du Théâtre 1935 告知 FTOF 主催
30	1935/ 3/27	13249	会議告知 2面	Destin du Théâtre 1935 告知 FTOF 主催
31	1935/ 3/31	13253	広告『ルガール』	Sans reprendre haleine.
32	1935/ 4/18	13271	広告『ルガール』	Sans reprendre haleine.
33	1935/ 5/ 2	13285	広告『ルガール』	Sans reprendre haleine.
34	1935/ 6/20	13334	会議告知 / 広告『ルガール』	国際作家会議告知 / Le Roman de l.Ehrenbourg
35	1935/ 6/23	13337	文芸記事	文化擁護のための国際作家会議について
36	1935/ 7/4	13348	広告『ルガール』	Le Roman d'Ilya Ehrenbourg nos rubriques.
37	1935/ 8/30	13405	広告『今日のロシア』	RUSSIE D'AUJOURD'HUI
38	1935/10/20	13456	講演会告知	文化の家 創造の第3日
39	1935/10/21	13457	講演会告知	文化の家 創造の第3日
40	1935/10/22	13458	講演会告知	文化の家 創造の第3日
41	1935/10/23	13459	講演会告知	文化の家 創造の第3日
42	1935/10/24	13460	講演会告知	文化の家 創造の第3日
43	1935/10/28	13464	文芸記事	エレンブルグの小説 Jean Fréville
44	1935/11/17	13484	広告『コムューヌ』	Les Champs Français.
45	1935/11/22	13489	広告『NRF』	Sans reprendre haleine.
46	1935/12/14	13511	広告『NRF』	Sans reprendre haleine.

図1～13は前稿（紀要 第54集）
20～22頁に掲載

図14 『私のパリ』 47頁

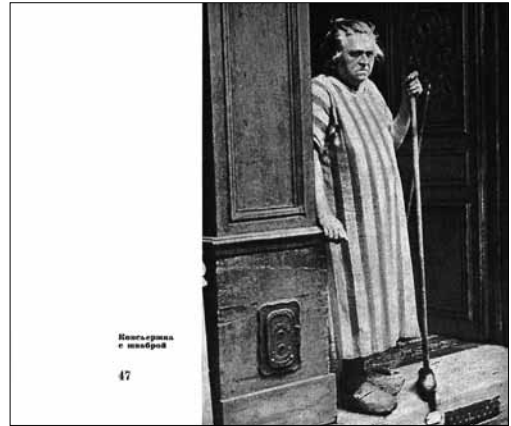


図15 『ルガール』 1934年1月第2号



この写真は、インターネット上の古本サイトから購入したものである。なお、私が調査した中央大学図書館所蔵のマイクロフィルムには、この表紙の画像はなかった。

図16 『私のパリ』 75頁



図17 『ルガール』 1934年2月2日発行、第3号、3頁



図18 『私のパリ』 31頁



図19 『ルガール』 1934年2月2日発行、第3号、4頁



図20 『私のパリ』 117頁

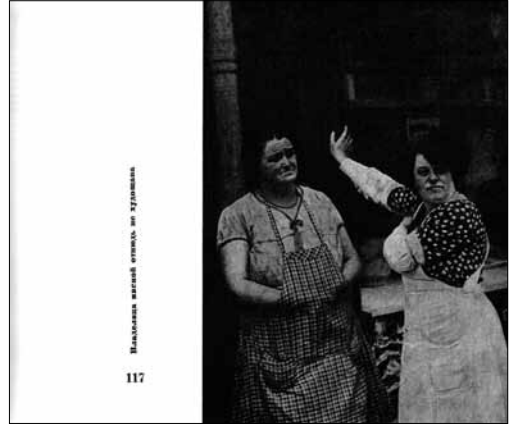


図21 『ルガール』 1934年2月9日発行、第4号、5頁



図22 『私のパリ』 65頁

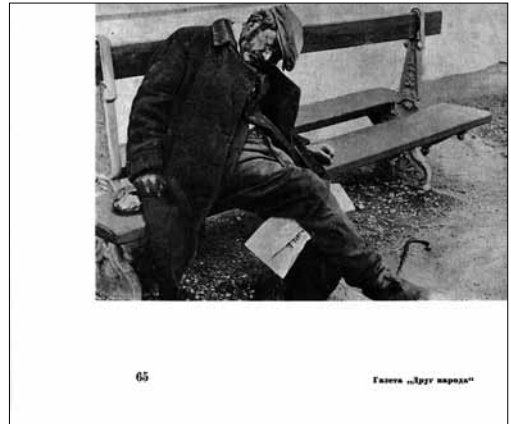


図23 『ルガール』 1934年2月9日発行、第4号、6頁



図24 『私のパリ』 109頁

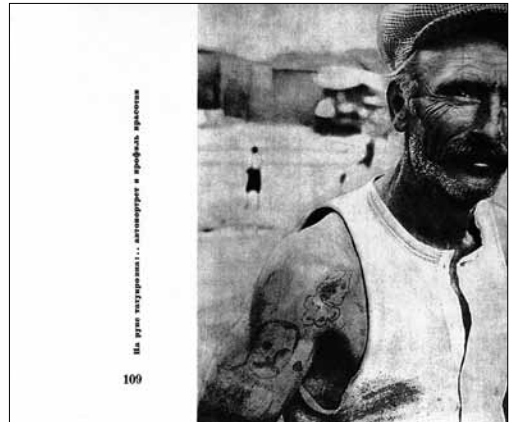


図 25 『ルガール』1934年2月16日発行、第5号



図 26 『私のパリ』141頁

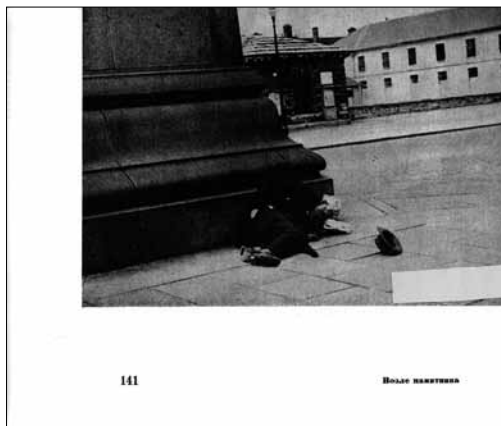


図 27 『私のパリ』140頁



図 28



Ben Shahn Self-Portrait with Angle Viewfinder, 1939 Ink on Paper, 20.5x25/6cm Fricke Leica Collection.

Deborah Martin Kao, Laura Katzman, Jenna Webster *Ben Shahn's New York. The Photography of Modern Times*. 2000, Yale University Press. より